

---

# **黒猫と装飾銃の始まり**

イイ日旅立ち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒猫と装飾銃の始まり

### 【NZコード】

N9113P

### 【作者名】

イイ日旅立ち

### 【あらすじ】

クロノスを抜け出したトレインだが、その時彼は一人では無く…

・

正月頭が暴走した結果変な妄想が浮かんできたので投稿します。色々と問題ありきな内容かもしれませんがあ暇な時にでもどぞ~

(前書き)

・・・何でしよう、ふと頭に思いついた妄想を文章におこうしたら、  
いつ短編を書いてしまった。正用頭つて怖いですね！

『初めまして、私は装飾銃ハーディスです。今は相棒マスターのトレインの銃として頑張ります!』

「うん? お前何言ってんだ藪から棒に」

『いえマスター。最初の挨拶は物事の基本ですよー。』

「ふうん、そうなのか~」

『やうなんですかー。』

お初にお目にかかります。私は無機物ですが、どんな因果かこうしてマスターの愛銃としてバンバンターゲットを抹殺しています

嘘です。そんな物騒な事する訳ないじゃないですか。私は清く正しい無機物ですよ？ 人殺しとかw

そんな訳で「どんな訳だよ」黙らつしゃいマスター！・・・ゴホン、今私達はクロノスから逃亡している最中で、追手を殺さないようマスターの人外の銃技で追つ払つてます。流石は私のマスター。

元々は感情の起伏の少ないマスターでしたが、とあるお方との出会いによって感情を取り戻してくれたお蔭で、私もこうして話せるようになりました。奇跡あるんですねえ～（他人事）

そしてしばらくは穏やかな時間が過ぎ、私も人を殺す事無く精々手足を撃ち抜く程度で済ませていたのですがここで不幸な出来事が。

あんのクサレナルシー……ゲフンゲフン！　いけない、私どしが罵倒がつい……では気を取り直して。

一度だけマスターのパートナー（私は絶対認めませんがね！）だつたクリードが突如、マスターの恩人であり親友だったあるお方を、サヤ様を斬殺。そしてマスターは色々考えた末、クロノスからの脱退を決意したのです。

「…にしてもやー」

『はい？ 何ですか？』

「いや俺って多分処分済みとして処理されるんだろうけど、どうしていつも追手が来るのかねえーとふとな」

『・・・・』

その問い合わせに関して、私は一応答える事が出来るのだが絶対に口にはしない。

『（よりにもよってあのアマア…！ まさかマスターに懸想していやがるとは…ッ！ そして？？の権力を行使してマスターを捕縛、その後なんかテキトーでつち上げてマスターを慰めるふりをしてそのまま……ぐわああああああ！ 美人なんて滅びてしまえっ！…）』

私をマスターと引き合わせてくれた恩人でもあるお方、セフィリア様がマスターの事を好きなのは確定的に明らかだ。

ナンバーズの中で群を抜いてイケメンであるマスターに想いを寄せるのは として当然の反応だけれども、あの女だけは許せない。

あつ、サヤ様は別です。あなた方は素晴らしい方です！  
私のメンテの時も凄く優しくしてくれました！ 別に磨く時のオイルが最高級品だったから贔屓している訳じゃありませんよ？

ですがあのアマ、もといセフィリア様だけはいただけない。

そもそも年齢不詳なのにあの美貌は一体何のチートだ？ スタイル抜群、頭脳明晰、武器であるクライストを使う剣術はまさに芸術。あの生けるバッグにもし本気でアプローチされてもしてみたら、マスターの貞操はあつという間に花と散るらむ……綺麗に纏めてる場合じやなくて。

『良いですかマスター！ セフィリア様の外見と口調に騙されては

「いけませんからね！あの笑顔の裏で何ドス黒い事を考えてるのか  
わかりやし！」

「へえー、私ってあなたにそんな風に思われていたんですね？ハ  
ーディス」

『ギクウ！？ 馬鹿なツ！？』

「た、隊長！？ なんで隊長自らここに来てるんスか！？」

・・・そう、それはある任務の後、私がマスターに如何にあの女  
が危険であるかを言おうとした時だった。

ナンバーズの中でも飛び抜けた察知能力を持つマスターの知覚を  
も掻い潜り私を掴むその手には、その白魚のような気品さ線の細さ  
からは想像もつかないほど圧倒的な握力が込められていた。

「私って、そんなに腹黒くて裏では何考てるのか分からないよう  
な、そんな胡散臭い女見えますかハートネット…？」

『おのれ貴様！ 少しでもマスターに近づいて…ってああ、ああああー？ そんなに近づくな触るなしだれかかるなあああああー。』

「落りつけって相棒！ そして隊長も離れて下やこー。」

「そんな……！ 私つて魅力ありませんか…？」

「い、いや、その、今はそんな事を話してる訳じや…」

『Iのメギツネ！ 私に実体があつたら間違いなくその幸せ真っ黒思考の脳みそに風穴を開けてやるのこいー。』

「おーハーーテイス！ そりゃここに遇わー。」

「あら？ その、幸せ真っ黒思考といつのはいつの事をする思考の事をいつのかじり？』（トレイインの上着を肌蹴せらる）

『クッ！ 貴様アアア……！ 私が手を出せないのをこい気に何と言つたらソゲフングフンッ！…けしからん事をー。』

・・・嫌な、思い出ですね…

今までベルゼー様というストッパーがいて下さっていたお蔭であの女の暴走にも歯止めが効いていましたけど、こうして逃亡している以上こちらを弁護してくれる存在などなく、捕まつたら最後。

私は鉄くずに戻されてマスターはあの女の玩具に……それだけは死んでも避けなければならない。いや別に私に『死』という概念は無いんだけども！

こうして、私（オリハルコン製の銃）とマスター（もう最高。これ以外に何と形容しようと？）の逃避行が幕を開けるのだった。

「の先に例え泥棒猫がいよつとも変身美幼女が出てこよつと果ては変態がまた顔を出してきたとしても…」

『マスターの敵は私が潰す！』

「正確には俺がだけどな」

『折角の気勢をそがないで下せ』よお～……』

「悪かつたつて。でも、『これからも宜しく頼むぜ？ 相棒』

私は銃。マスターの前に立ちふさがるモノあらば、全靈をもつて  
撃ち抜いてみせる！

そして！ そしていつかはマスターの気持ちも……！

『・・・ハイっ！ 勿論です、マスター！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9113p/>

---

黒猫と装飾銃の始まり

2011年1月9日05時26分発行